

日本と中国における幼児教育思想交渉史

— 先秦代から明代における中国幼児教育思想の根本原理 —

増 田 翼

(2011年2月4日受理)

はじめに

日本教育史研究の領域において、江戸期の子ども観、子育て観に関する文献は数多く存在する。けれども、中国における子ども観、子育て観の展開と、そこから幾許かでも影響を受けたであろう江戸期におけるそれとを連関させて考察した研究はそれほど多くない。たとえば、先行文献のなかには、中国から日本へと伝来した胎教思想について研究したものがいくつか存在しているが、これらの研究がこれまでに明らかにしてきたのは、中国において発展した胎教思想が医学書を通じて日本に伝来したという点¹⁾、また、江戸期には主に『列女伝』や『小学』——詳しくは本論にて——を通じて儒学者の間に胎教思想が広まっていったという点であった²⁾。こうした研究の成果は、日本の子ども観、子育て観の一部分が中国伝来のものであることを物語ってはいるものの、研究の範囲が、(子どもが生まれて以後の)幼児教育思想の伝播に関する詳細にまで及ぶことが少ないため、判然としないものであった。

そこで本研究では、中国における幼児教育思想の展開を踏まえたうえで、中国からどのような子ども観、子育て観が日本へと伝播したのかを詳らかにすることを目的としたい。ただし、この研究目的を達するためには、古代中国からの幼児教育思想を丹念に見ていくだけにとどまらず、日本と中国、両国の幼児教育思想の接点、連関を見出すという作業が不可欠のため、相当な準備が必要である。そうした理由から本稿では、まずその基礎的研究として、先秦代から明代における中国幼児

教育思想の根本原理を中心に見ていきたいと思う——本稿では、両国の幼児教育思想の接点、連関を見出すというところにまでは踏み込めないが、中国での言い回しと類似の表現が明確に認められるような日本の文献の一部については、註に挙げておく——。なお、中国における幼児教育思想の展開は、先に触れた胎教思想の展開と深く結びついているため、この点にもごく簡潔に触れておきたい。

第1章 胎教思想

中国においては、古代より、哲学、政治、文学、教育、医学などの各分野の典籍のなかで〈胎教〉に関する論述が豊富に綴られてきた。たとえば、前漢代(前206-後8)に賈誼(Jia Yi: 前200-前168)によって書かれた『新書』「胎教」篇、同じく前漢代に戴徳(Dai De: 生没年未詳)によって撰された『大戴礼記』「保傅」篇、前漢代末期に劉向(Liu Xiang: 前77-前6)によって撰された『列女伝』などには、古代中国において実際に行われていた胎教に関する詳細な記述が見られる。なぜこうした書物が出されたかといえば、「漢代になり封建王朝が建立されると、長治久安の統治が望まれるようになり」、特に「帝王が早期の胎教を受けたか否かが、国家の未来の運命を左右するという考えが支持され³⁾」ようになったからであった。その内容は、妊婦に対して各方面にわたる厳格な動作や思想を要求するものであり、そのどれもが、胎児の成長と発育に影響し、ひいては太子その人の人格にとどまらず国の将来をも左右するとの認識に立ったがゆえのものであ

た。もちろんその記述には、観念的で非科学的な面も含まれていたが、生まれてくる子に想いを馳せるという点で、当時としては最上のものだったといえるであろう。そしてまた、これら胎教書の多くに共通する原理を挙げるとすれば、それは、賈誼『新書』「胎教」篇の冒頭にも明記されているように「其の本を正して而して萬物理まる。之を毫釐に失すれば、差ふに千里を以てす」、「故に君子は始を慎む⁴⁾」という一説、すなわち端的に表せば〈慎始〉だといえるだろう。この原理に従った胎教思想は次第に一定の様式を纏うようになり、とりわけ『列女伝』「母儀伝」篇のなかにある「周室三母」の一節に書かれた「婦人は子を孕むと、寝るには横ざまにならず、坐るには端居せず、立つには爪先立ちせず、奇妙な味のものは食べず、切り方の正しくないものは口に入れず、敷物が歪んでいれば坐らず、醜いものは見ず、淫らな音楽は聴かぬようにした⁵⁾」という一説が、その後の種々の書物のなかで度々繰り返されるものとして定着していったのである。

さらに後漢代(25-220)以降、胎教に関する記述は大きく二つの経路——①思想家による展開、②医学者による展開——に分かれ展開していくことになる。以下では、簡潔に各々の系譜を辿っておこう。

①思想家による展開

一つ目の経路としては、思想家たちによる胎教思想の継承的展開が挙げられる。後漢代、『論衡』を著した王充おうじゅう(Wang Chong; 27-97?)の胎教思想は、男女が結ばれる際の身体、生育と精神、情緒などのすべてがお腹のなかの新生児の成長に影響すると考えるものであった。したがって王充は、飲食、環境、母親の情緒の影響といった点の考察により胎教の意義と作用を論述した⁶⁾。魏晋南北朝時代(220-589)にも、西晋の張華(Zhang Hua; 232-300)が著した『博物志』巻十「雑説下」篇や顔之推がんしすい(Yan Zhutui; 531-591)が著した『顔氏家訓』など胎教に触れている著作が存在している⁷⁾。さらにこうした胎教思想は、少し時代を経て、南宋代(1127-1279)の朱子(朱熹Zhu Xi; 1130-1200)が手がけた『小学』「内篇」「立教第一」

の記述へと継承されていくのである。朱子は書いている。『列女伝』にいう。大体、古の胎教の法というのは、婦人が妊娠すると、寝る時には、まっすぐに安臥して、横むきにはならない。坐る時にも、姿勢を正しく、身体のかたむかないようにする。立つにも、重心が片足にかかって身体のかたむくことのないようにする。また、食事には刺激の強いもの、味の調和のとれていないものを避ける。肉の切り方が乱暴で、切り目の正しくないものも口に入れない。坐る時、席のしき方が曲っておればそれに坐らない。目に映るもの、耳に入るもの、すべて、邪淫の感じを受けるものには、目をとめ耳をかたむけない。……このように気をつけて妊娠中を過ごせば、形の端正な、人にすぐれた才能を持つ子を生むことができる⁸⁾と。

ところで、ここで触れた、王充、張華、顔之推、朱子のように思想家による胎教思想の展開には、同時に、幼児教育思想をもその著作のなかで記すことで、胎教から幼児教育までを一連の流れのなかで論じようとする特徴が見られる。胎教の重視が、後の幼児教育へ同様の視点を提供することになるという点は、中国幼児教育思想史を辿るうえで欠かすことのできない項目であるが、その詳細には、後ほど触れることにしたい。

②医学者による展開

二つ目の経路としては、医学書において——医学的視点でもって——胎教を論じるものが挙げられる。古くは、前漢代の帛書『胎産書』⁹⁾がある。ここには、妊娠期間中の各月の胎児の生長、および妊婦の起居飲食についての注意事項が書かれているが、こうした見方は、医学的胎教思想の根幹に位置するものとして後々まで影響を及ぼすことになる。たとえば、魏晋南北朝時代、北齊の名医であった徐之才(492-572)が、その著『逐月養胎法』のなかで、『胎産書』の記述とともに、妊娠期によく見られる疾病ならびに処方するとよい薬方について詳細な見解を加えている。隋代(581-618)煬帝のときの大医博士、巢元方(Chao Yuanfang; 生没年未詳)らが編撰した『諸病源候論』にも〈逐月養胎法〉が書かれている¹⁰⁾。その後、唐代(618-907)の名医、孫思邈(Sun

Simiao: 581-682) が『千金要方』のなかの「卷二 婦人処方論(上) 第三 養胎」という一篇において、系統的に妊婦の起居飲食と禁忌などの胎教問題を述べ、「外象而内感」の問題を強調した¹¹⁾。北宋代(960-1127)、王懐隠(Wang Huaiyin: 生没年未詳)らによって編纂された『太平聖恵方』卷七六「胎教論」のなかにも巢元方とほぼ同一の記述が見受けられる¹²⁾。南宋代には、陳自明(Chen Ziming: 1189-1269)が著し、その後の産婦人科専門書に影響を与えたとされる『婦人大全良方』のなかで種々の胎教思想が見られるし、元代(1271-1368)の著名な医学者、朱震亨(Zhu Zhenheng: 1281-1358)は、その代表作『格致余論』のなかの「慈幼論」という一章で、胎児と「母同体」の生理機制から出発し、胎児と母体の涼、熱、健、病といったことが密接に関連していることを論じている¹³⁾。このように、医学実践が医学理論のかたちでまとめあげられていくことによって、胎教思想は科学的に発展していくのである。それは胎教思想全体を貫いている〈慎始〉を基軸に据えながらも、より医学的専門性が加味されたものとして独自に発展を見せたのである。

第2章 幼児教育思想の展開

さて、上記のような〈慎始〉を基盤とする胎教思想は、そのまま子どもに対する態度にも反映していく。胎教思想と同様に、中国では古代より、幼児教育に関する論述が交わされてきた。とりわけ〈慎始〉という原理にあるように、始めが肝心であり、できるだけ早くからの教育を重視するという姿勢は、多くの論に共通する点だといえるだろう。さらには、〈始〉だけでなく、子どもの発達の段階を捉えたうえで、時宜に適うようなはたらきかけが必要であるとの認識も明確なかたちで存在した——もちろん、古代中国において語られていた発達段階は、現在の学術的見解からみれば甘いものであるが——。

すでに周代(前1046-前256)のころ、子どもの教育に対しては順を追って一步一步進めるべき、との認識があった。つまり、各年齢段階によって教育内容と目的は異なるのだから、子どもの心

身発達の段階およびその特徴に依拠した教育課程が配されるべきとの認識である。たとえば、戴徳『大戴礼記』「本命」篇には、子どもの心身発達過程について次のように書かれている。「人は生まれながらにして備わらないものが五つある。目で見ることができず、食べることができず、行うことができず、言うことができず、化することができない。生まれて3月後にあって初めて見ることができるようになる。生まれて8月後に歯が生える。生まれて1年にして膝蓋骨が形づくられて能く歩行ができるようになる。3年後には人びととよるこんでうち融けてはしゃぐほどの幼児に成長して、次第によく話すようになる¹⁴⁾」と。あるいは、『礼記・内則』には次のようにある。「子が物を食べられるようになると、右手を用いることを教える。ものが言えるようになると、男は『はい』といい、女は『はいい』という。男は革の小囊、女は繪の小囊を腰に下げて、手ぬぐいを入れる。子が生まれて6歳になると、数と方角の名まえとを教える。7歳になると、男女は同じ席に座らない。いっしょに食事をしない。8歳になると、戸口を出入りするとき、席について飲食するときは、必ず年長者のあとに従ってする。はじめて人に譲ることを教える。9歳になると、曆を見て日を数えることを教える。10歳になると、男子は外に出て教師につき、外宿して、読み書きと算数とを学ぶ。……女子は10歳になると、常に内にいて出ない。乳母はことばを穏やかにし顔色を和らげ、年長者の言うことをよく聞いてすなおに従うことを教える。麻を紡ぎ、蚕の繭から絹糸を作り、絹布を織りひもを編む。女の仕事を学んで衣服を供給する¹⁵⁾」。

ほかにも、かなり古くから子どもを〈子ども〉として捉える見方、あるいは嬰幼児と大人とを区別して捉える見方が存在した。たとえば、後漢代の経学家、訓詁学家であった劉熙(liu yi: 生没年未詳)は、物の名や字義を訓釈した語学書『釈名』卷三「積長幼」において、「嬰」の字、「幼」の字を次のように説明している。「人は嬰児という段階からその生をはじめが、そもそも『嬰』の字は、まさに子どもを胸の前で抱えている様子を示しており、そこから『嬰児』というのである。次

の段階では子どもは『孺子』と呼ばれるが、これは、子どもがまだ弱い存在であることを示している。『幼』の字はすなわち『少』の意であり、これは、幼児がまだ生まれてそれほど時間を経ている存在であることを示している。たとえば、満7歳の子どもには、是非観念の初歩が形成されているにすぎず、自らを制するようわきまえていても、思うようにはいかず恣意的な行動に終わってしまう¹⁶⁾。

ほかにも多くの典籍において、子どもが〈学び〉を開始すべき年齢について述べられているが、これなども子どもの性質を十分に捉えたいうえでの提言だといえるだろう。たとえば、『礼記』「曲礼」では、「人生れて10年を幼と曰ふ。學ぶ¹⁷⁾」とあるし、『大戴礼記』「保傅」では、8歳入学を規定している¹⁸⁾。朱子が撰した『大学章句』「序」には、「人が生まれて8歳になると、天子や三公（太師・太傅・太保）の子弟から庶民の子弟に及ぶまで、みな小学校に入れ、そこで水をうって掃除をしたり、人とのうけこたえをしたり、立居ふるまいをしたりすることの折りめや、礼儀作法と音楽、弓射や馬車の扱い、読み書きと算数などの六芸の学科を教えた¹⁹⁾」と書かれている。こうした記述からも、入学と入学前（就学前教育、幼児教育）という区分概念がかなり古くから存在したことになる。

それでは、中国における幼児教育思想の根本原理はどのようなものだったのであろうか。また、どのように展開していくのであろうか。ここからは、中国における幼児教育思想の根本原理を、①環境重視の早期教育、②子ども中心主義の教育、という二つの観点から考察してみたい。

①環境重視の早期教育

「孟母三遷」といった故事を挙げるまでもなく、中国の幼児教育思想には、環境重視の考えが根強く存在する。たとえば、前漢代における賈誼は、『新書』「保傅」篇において、「赤子たるよりして教固より已に行はる²⁰⁾」とあって、早期教育を強調した。早期教育が重要な所以は、「幼児期に形成された道徳品行は、根深く強固で、拭い去ることは難しく、また天性と溶け合うものだから²¹⁾」で

あり、賈誼はこうした考えを補強すべく、『新書』「保傅」篇において、孔子（前551-前479）の一句、「少成は天性のごとく、習慣は自然のごとし」——幼児期に獲得したものは生まれつきのようにあり、なんでも習い慣れると常になる——という一句を引用している。さらに、子どもの心智発達のレベルと教育とは緊密な関係にあるとし、「習ひ智と長ず、故に切磋の功を積むことで而して愧ぢず。化、心とともに成る、故に道に中ること性のごとし²²⁾」といいながら、子どもの本性（素質）以上に教育の重要性を論じたのである。

ところで、早期教育には別の意義もある。賈誼によれば、「心未だ濫れずして、先づ論教すれば、則ち化成り易し」、すなわち子どもは未だ複雑な社会矛盾には足を踏み入れてはならず、心は単純にして、良好な道徳観念を形成しやすいが、他方で、不良癖に染まりやすいのも確かで、したがって善悪の認識能力をできるだけ早く増強すべきなのである。換言すれば、未だ外界からの影響を受けてはいない子どもにとって、教育の及ぼす効果はその子どもの一生の成長と密接に関係しているというのである。賈誼は、人間同士の天性に大差はないと考えていた。有道の者と無道の者の違いは、後天的な環境と教育の影響によって造成されたものであるというのである。しかしてこの影響は、生命誕生そのときからすでに開始されているという。当然、「毫釐に失すれば、差ふに千里を以てす」と強調する賈誼だからこそ、幼児を左右しかねない人物、すなわち保育者の人選には注意し、善き影響を受けるようにせよ、と主張するのである。このような思想のもと、とりわけ太子を教育する際には「太子の善は蚤く論教すると左右を選ぶとに在り²³⁾」と強調するのである。また賈誼は、『新書』「連語」篇において、国家を治めるにどのような人材が求められるかに言及する際、「練糸に似たり、之を藍に染むれば則ち青く、之を緇に染むれば則ち黒し」、言を換えれば、「善佐を得れば則ち存し、善佐を得ざれば則ち亡ぶ²⁴⁾」と語っているが、こうした譬えからも賈誼が環境の影響を強調していることが窺えるだろう。

ほかにも、環境重視の考えが根強いいくつかの例を見ておこう。たとえば、前漢代の劉安（Liu

An: 前179-前122)は、『淮南鴻烈解(淮南子)』「斉俗訓」において、次のように書いている。「人の本性について考えてみるに、乱れ汚れて、清く明らかでいられないのは、外物が、この性をけがしているからである。羌・氐・獫狁・翟、四夷の地の赤子も、生まれおちた時にはみな同じ声で泣いているが、成長した後は、何人もの通訳を間に置いても、言葉を通じ合えない。それは、教化や風俗がそれぞれ異なっているからである。今、(仮に)生後3箇月の赤子を他国に連れて行ってしまえば、もはや故郷の風俗を知ることはできない。してみれば、衣服や礼儀・風俗は、人の生まれつきに備わったものではなく、外から受け入れたものである。……いったい、繭から取ったばかりの絹は白いが、くろつちで染めれば黒くなる。機で織ったばかりの絹は黄色だが、丹砂で染めれば赤くなる。人も本来は邪悪ではないのだが、久しく俗世にならずにいるうちに変易し、変易することによって本来の性を忘れて、邪悪な性質になってしまう²⁵⁾。これなども環境から受ける影響の大きさを様々に譬えながら述べているものの一つといえよう。あるいは後漢代、王充は、その著『論衡』「率性第八」篇において、次のように幼児教育問題にも触れている。「人間の性を論ずれば、必ず善なるものもあるし、悪なるものもある。その善なるものは、もともとそのまま善であるが、その悪なるものは、特に教育訓告し、率先勉励して、その人をして善行をさせるようにすべきである。いったい人の君たり親たるものは、家来や子供の性をよく観察し、それが善であれば、それをそだて勧め励まして、悪に接近させないようにし、それが悪であれば、かばい助けて予防措置を講じ、しだいに善行の方面に進ませるべきである。善がしだいに悪に感化されたり、悪がしだいに善に感化されたりして、かくて人間の性行が形成されるものである」と。さらに、「よもぎの性質は麻の間に生えれば、支柱がなくとも自然に真つすぐにそだつし、白いうす絹を黒色の染料の中に入れておけば、練りあげなくとも自然に黒く染まるものである。あのよもぎの本性は真つすぐでなく、うす絹の本質は黒くはないが、麻が助けたり緇が染めたりすると、真つすぐや黒くならせる。いったい人

の本性は蓬や紗のようなもので、だんだんと感化されるにつれて、善悪の変化が生じてくるものである」といった比喩を挿みつつ、「つまりは教化がだいじであって、人間の本性によるものではない²⁶⁾」と結論するのである。「教化」こそが重要であり、子どもは周囲に「感化」されるのだという王充の論は、極めて環境重視の考え方だといえよう²⁷⁾。

先に挙げた顔之推も、『顔氏家訓』のなかで、環境重視を謳う幼児教育思想をかなり明瞭に述べている。彼はいう。「人は幼少の頃が精神集中し鋭敏である。成年以後になると気が散り易い。だから勿論早く教育して、機会を失してはいけなわけである²⁸⁾」と。幼児の思想は単純で、各種の思想観念に染まっておらず、知識欲も強く、なおかつ生活の疲れと情感の妨げがなく、可塑性が大きいなど、まさに学習と教育受容に好期であり失すべきではない、というのである。あるいは彼は、民間の諺を賛同をもって次のように紹介している。「嫁の仕込みはお興入れ当時、子供の躰はみどり児当時²⁹⁾」と。顔之推は、人の発達において、幼児期は基礎をかためる重要な段階だと考えた。年長者は、この時期を利用すべきであり、早いに越したことはない。顔之推は、かつての宮中での胎教の在り様を紹介しつつも、「一般人の場合には、これを手本にするわけにもいくまい」として、次のようにいっている。「少なくとも3、4歳になって、ほぼ大人の表情が判るようになり、その喜怒の感情が識別できる頃になったならば、すぐ躰をはじめて、行らせることは行らせ、止めさせることは止めさせるという風にはすべきであろう³⁰⁾」と。

さて、このように環境重視であるがゆえに早期教育を所望する幼児教育思想の展開を見たわけだが、ここでは子どもを、良くも悪くも環境から影響を被る受動的な存在として把握する傾向が強いことが窺えるだろう。これは、前章で見た、胎教思想とも大きく関わっている。なぜなら、こうした環境重視の幼児教育思想を提唱する者たちの多くが、胎教についても論じているからであり、彼らは、幼児教育を胎教からの延長線上において、同次元の原理に基づいて、すなわち〈慎始〉と

いう根本原理に基づいて考案しているといえるのである。たしかに、胎教の時点では、子どもは、環境から受ける影響にほとんど依存するしかない存在かもしれない。けれども、生後の子どもは、環境から受ける影響だけでなく、環境に主体的にかかわるといえる能動的な側面があることを忘れてはならない。むしろ、能動的なかわりこそが子どもの成長において不可欠だといえるが、こうした点については、ここまで触れた論者の考えにおいてはあまり見受けることができないのである。

②子ども中心主義の教育

もちろん、中国における幼児教育思想のすべてが、上述したような環境重視の早期教育派であるわけではない。たとえば、孟子（前372-前289?）などは、人は自然本性に応じた生き方をすべきとの理解を示していた人物の一人である。「拔苗助長」の故事がそれである。「むかし宋の国のある百姓が、苗の成長がおくれているのを心配して、なんとか早めたいものと一本一本引っぱってやった。グツタリ疲れきって家にかえるなり、『ああ、今日は疲れたわい。苗をみんな引きのばしてやったものだから』と家のものに話したので、息子が〔変に思っで〕いそいで田圃へかけつけて見たら、苗はすっかり枯れていたとのことだ³¹⁾」。

ほかにも戦国時代の道家の代表者、荘子（前369-前286）は、『荘子』外篇「至樂第一八」のなかで、魯侯が鳥を養う方法によって鳥を養ったのではなく、人間である自分を養う方法で鳥を養ったために三日で死んでしまった、という寓話を挿入しつつ、次のように説明している。「魚は水中にいれば生きるが、人は水中にいれば死んでしまう。このように魚と人とが相反するのは、それぞれ好むところ悪むところが互いに違って、生死もまた違って来るからなのである。この故に昔の聖人は人の能力を一律に考えず、仕事を同等にさせず、実質に適合する名を得させ、本性に適するままに進むべき道を設けたのである。この方法をこそ条理が通達して福德が保たれる道というのである³²⁾」と。

こうした孟子や荘子のように、「本性に適するままに」生きるという考えは、次第に、人間自然

本性に従うように教育すべきとの見解へと結びついていく。この点を明瞭に述べたのが、明代（1368-1644）における陽明学の祖、王陽明（王守仁 Wang Shouren: 1472-1528）である。王陽明の「基本的立場」は、「児童の性情の自然を尊び、それに順応しながらこれを誘導教化し、その生意を暢達させ、その善心を発揚させる³³⁾」という点にあった。彼はいう。「樹木がまだ小さくて、僅かの芽しかないなら、少量の水をかけてやり、芽が少し伸びたなら、水を少し多くしてやる……木が更に大きくなり、両手で握れる位から、両腕でかかえるほどになるまでの水のかけ方は、すべてその程度に適ったようにすべきであって、もしまだ小さな萌芽であるときに一桶の水を全部頭からかけたなら、木は水浸しになって、すっかり参ってしまうに違いないのだ³⁴⁾」と。もちろん、これまで触れてきた種々の論者が、人間の興味・関心を蔑ろにしてきたといたいわけではない。しかし、たとえば、王陽明が、「昔の教育者は、人の人たる道を教えたが、後世になって、古典の暗誦や、作文作詩の風習が起ってから、この先王の教育は遂に亡びてしまった」、「毎日ただ句読の切り方や試験の作文を課するだけ」、「時に鞭で打ったり縄で縛って、罪人を扱うような厳格なことをするから、彼らは学舎を刑務所の如く思って入ろうとせず、教師を仇かたきの如く考えて、近寄らない」と語るように、環境重視の早期教育への偏重が、ときに〈子どもの興味・関心〉への視点を失わせたことに間違いはないだろう。

こうした現状を的確に批判し、子どもの側から教育を捉え直そうとした王陽明の考えは、たいへん貴重であるといえよう。少し長くなるが引用したい。「児童の気持ちというものは、自由に遊ぶことが好きで拘束されることを嫌うものである。草木が若芽を吹き出したとき、これをそのまま自由に伸ばしてやれば、どしどし伸びて行くが、邪魔したり曲げたりすれば、勢いが衰えるのとよく似ている。だから、児童を教育するに当たっては、必ずその進み向かおうとする気持ちを励ませ、心から喜ぶようにさせるなら、その進歩の勢いはおのずから止めることができないほどである。譬えてみると、時を得た雨や春風が潤し渡ると、草木

は芽を吹き勢いよく伸び出さないものはなく、自然に日に月に成長して行くが、もし突然寒気がぶりかえして、霜が降り氷が張ったりすると、元氣は衰え、日に日に枯れて行くようなものである。故に、およそ詩を歌うように誘導することは、単に高尚な情意を発露させるだけでなく、飛び跳ねたり、大声を出して叫び出したい衝動を歌に洩らさせ、内部に鬱屈した感情を音節の上に発散させるためでもある。……彼らの情意に従って導き、彼らの性格を調整し、その卑しく醜いものをなくし、その粗野・頑固さを無言のうちに改めて行くと共に、日に日に道義の世界に自然に進んで少しも困難を感じしめず、理想の中和の境地に入りながら、そのことに気付かせぬように指導して行くことである。これこそ先王が教えを立てた深い心である³⁵⁾。ここには、子どもの能動的な側面（自発性）に働きかけていくという考え、さらにはそれを「気付かせぬように指導して」いくといった消極教育的な考えが見られるのである³⁶⁾。山崎純一（1939-2003）は、こうした王陽明の考えは「東洋における児童の発見」であるとの言葉を添えつつも、次のように注意を促している。「王陽明は童子=子どもには、幼児期や児童期という発達段階があり、それぞれの発達段階にはそれぞれの特有の発達課題があるとまで考えたわけではない。子どもは自然に伸びゆく感性と遊戯心をもっている。拘束を加えなければゆがむことなく成長する。その成長力に即した指導法を講ずれば、活動力にあふれた『道德人』を育成できるようになると考えたまでである³⁷⁾」と。

先に触れたように、環境重視による早期教育を主張してきた中国幼児教育思想は、子どもの〈始〉、あるいは子どもの心身の各発達段階を詳細に記述しようと試みてきたものであるといえる。これに対して王陽明は、そうした区分による特徴の理解が、実際は子どもへのかかわりを高圧的、操作的にしてしまう可能性を孕んでいることを見抜き、むしろ子どもの側から自発性を引き出すような教育観への転換を示唆したのだといえるであろう。

おわりに

いずれにせよ、中国幼児教育思想の根本原理が〈慎始〉にあることは間違いない。それが、胎教思想の展開や環境重視の早期教育論へとつながっていったのである。しかし、そのように子どもを〈始〉めから人間文化（人為的世界）へと強引に引き込むために教育の必要性を唱えるのではなく、人間自然本性に従うかたちで子ども自らの能動性のかかわりを引き出すこそ教育であると論述した者が存在したことも忘れるわけにはいかない。

ところで、思想とは、人々の心に深く感銘を与えるような言説のまとまりであり、それが長い歴史の荒波に飲まれても消えずに現代の我々にまで受け継がれているものである。我々はその思想のなかに、実践に基づく何らかの意味を見出すからこそ、それを継承していくことの必要性を見出しているのだともいえよう。私自身、保育原理、教育原理の授業を担当するに当たり、人の育ちや人を育てることについての言い回しや言説や思想にはいくつかの様式が存在している、ということそれ自体にたいへん興味を抱いている。ときにそれは、互いに矛盾を孕みながらも我々の幼児教育理解への導きを支える枠組みとなっている。本稿で見たような、①環境重視の早期教育論、すなわち子どもは受動的な存在という子ども観とそれに応じた教育観と、②子ども中心主義の教育論、すなわち子どもは能動的な存在という子ども観とそれに応じた教育観も、これまでの教育史のなかで無数に取り上げられてきた代表的な二項である。この両者を含む中国幼児教育思想の展開がどのように日本に影響をもたらした、我々の幼児教育観へと結びつくのか、これが今後明らかにせねばならない本研究の最大の焦点となろう。日中両国でのいくつかの類似点は本稿の註にも記したが、より本格的な考察は、次の機会において展開していきたい。

【註】

- 1) 田中昌人「胎教の検討（1）」『教育学研究』第24巻第3号、1957年、18頁。
- 2) 山住正己、中江和恵編注『子育ての書』1、平凡社、1976年、24-25頁。ほかにも、村山貞雄「江戸時代の胎教と乳児教育の研究」、『日本女子大学紀要 文学』

- 部』第19号、日本女子大学文学部、1970年、96-118頁）、中江和恵「胎教思想の歴史的検討」（『教育学研究』第50巻第4号、1983年、11-20頁）、斎藤醇吉「江戸時代の家庭教育（Ⅱ）——出産と胎教——」（『日本私学教育研究所紀要』第22号（1）教育・経営篇、1986年、419-454頁）などが挙げられる。
- 3) 杜成宪、单中惠主编『幼儿教育思想史』人民教育出版社、2008年、17頁。
 - 4) 国民文庫刊行會編『國譯漢文大成 賈誼新書』国民文庫刊行會、1925年、210頁。
 - 5) 劉向著、中島みどり訳注『列女伝』1、平凡社、2001年、95-96頁。
 - 6) 山田勝美『新釈漢文大系 第68巻 論衡（上）』明治書院、1976年、100-102頁。
 - 7) 顔之推著、宇都宮清吉訳注『顔氏家訓』1、平凡社、1990年、8頁。なお、この『顔氏家訓』は「唐宋時代には特に愛読されたようで、『家訓』とさえいえば、他でもなく『顔氏家訓』を指すほどであった……『顔氏家訓』はそれ程唐宋時代には独歩の地位を讀書界に維持していたのである。さらに、『顔氏家訓』は日本にも早くから伝来していた。「我が邦で『顔氏家訓』が好んで読まれた理由も恐らくは、それは立身治家の要書であった」からだという（同上書、210-211頁）。実際、貝原益軒（1630-1714）も『大和俗訓』のなかで、「顔之推は『人身得がたし、空しく過ぐることなかれ』といった。万物にすぐれて、このように人と生まれたのは、まことに幸いであるから、人身得がたしといったのである。」と述べている。ほかにも『楽訓』、『家道訓』にも「顔之推」からの援用が見られる。また実際に『家道訓』には「顔氏家訓」という文字も見受けられることから、貝原益軒がこの書を読んでいたことは間違いない。
 - 8) 宇野精一『新釈漢文大系 第3巻 小学』明治書院、1965年、17頁。こうした儒教思想に取り込まれた胎教思想の影響からか、日本においても、たとえば、中江藤樹（1608-1648）が『鑑草』（1647）のなかで「胎教の心もち」、「食物をもよくつつしみ、居ずまい・身のはたらきをも正しくつつしみ、目にむざとしたる色を見ず、耳に邪なる声をきかず……」（山住正己、中江和恵編注『子育ての書』1、207頁）と残した一節などに類似の言い回しを見出すことが可能である。
 - 9) 1973年、中国湖南省長沙にある「馬王堆」という前漢代初期の墳墓から発掘された帛書のなかに、この『胎産書』も含まれていた。馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書』文物出版社、1983年。
 - 10) 巢元方著、南京中医学院校釈、牟田光一郎訳『校釈諸病源候論』緑書房、1989年、776-778頁。ところで、貝原益軒は、自らの著作のなかで巢元方『諸病源候論』を引用しているから、その影響は少なくないといえるだろう。たとえば、『養生訓』で引用している。
 - 11) 千金要方刊行會編『備急千金要方』上巻、1976年、119-132頁。貝原益軒の著作には、孫思邈『千金要方』からの引用も見られる。たとえば、『養生訓』で引用している。
 - 12) 『東洋医学善本叢書 第20冊』オリエント出版社、1991年。
 - 13) 臨床漢方婦人科叢書1『朝鮮活字刊本 新編婦人大全良方』オリエント出版社、1996年、305頁。朱丹溪（1280-1357）撰「格致余論・局方發揮」小曾戸洋、真柳誠編『和刻漢籍医書集成 第6輯〔1〕』エンタプライズ、1989年、442頁。ほかにも、万全（1327-1373）の『婦人秘科』「養胎」篇や、明代（1368-1644）における許相卿（1479-1557）の『许云邨胎謀』、徐春甫（1520-1596）の『古今医統大全』など、医学的胎教思想は継続的に語り継がれていったのである。
 - 14) 栗原圭介『新釈漢文大系 第113巻 大戴礼記』明治書院、1991年、513-516頁。
 - 15) 宇野精一、平岡武夫編「全釈漢文大系第13巻」市原亨吉、今井清、鈴木隆一『礼記 中』集英社、1977年、197-200頁。
 - 16) 廖其发主编『中国幼儿教育史』山西教育出版社、2006年7月、26-27頁。
 - 17) 宇野精一、平岡武夫編「全釈漢文大系第13巻」市原亨吉、今井清、鈴木隆一『礼記 上』『曲礼』28頁。
 - 18) 栗原圭介『新釈漢文大系 第113巻 大戴礼記』「保傅」。
 - 19) 「『大学章句』序」金谷治訳注『大学・中庸』岩波書店、1998年、88頁。このような年齢の異同については、古人の年齢の計算方法が現在とは違うことから、これらの論は大方近いものであると理解できるという（何晓夏主编『简明中国学前教育史』北京师范大学出版社、2007年、12頁）。
 - 20) 国民文庫刊行會編『國譯漢文大成 賈誼新書』、105頁。
 - 21) 孙培青主编『中国教育史』（修订版）華東師範大学出版社、2000年、114頁。
 - 22) 国民文庫刊行會編『國譯漢文大成 賈誼新書』、107頁。孔子は、「生まれつきは似よっているが、しつけ（習慣や教養）でへだたる」（『卷第九 陽貨第一七』『論語』岩波文庫、237頁）とも述べている。人間は、生まれつきの段階ではほとんど差異はなくとも、後からの「習い」の良し悪しによって大きく差異が生じるというものである。
 - 23) 国民文庫刊行會編『國譯漢文大成 賈誼新書』、109頁。貝原益軒『和俗童子訓』、『家道訓』には「賈誼の言葉に『太子をよくするは、早く教うると、左右をえらぶにあり』とある。これ古今の名言である」とあるように、賈誼の『新書』を読んでいたことも確認できる。
 - 24) 国民文庫刊行會編『國譯漢文大成 賈誼新書』、114頁。中国には古来より〈染まる〉ことに関する言説が数多く存在している。たとえば、『墨子』「所染第三」篇の一節を挙げておこう。「子墨子のことばに、白い絹糸を染める者の仕事を見ながら感嘆していったことがある。『青い染料に染まれば、青くなり、黄色の染料に染まれば、黄色になる。入れる染料が変われば、糸の色もまた変わる。五たび入れ終わるだけで、五つの色になる』とある。だから、染まるということについて

- は慎まなくてはならない。ただ白い絹糸を染めるときだけ、こうなるのではない。国の場合にも、また染まるといふことがあるのだ。」渡邊卓『全釈漢文大系 第18巻 墨子(上)』集英社、1974年、47頁。
- 25) 楠山春樹『新釈漢文大系 第55巻 淮南子(中)』明治書院、543頁。
- 26) 山田勝美『新釈漢文大系 第68巻 論衡(上)』、122-126頁。よもぎの話は、『荀子』『勸学』篇にも見られる。「蓬は麻の茂みの中に生えると、つかい棒を立てなくてもまっすぐに上に伸びる。……君子は住むのには必ず環境のよい所を選び、交わるのには必ず教を受けることのできる人を友とするのは、それによって、悪へ引きずり込まれて行くのを防ぎ、妥当な道に近付いていこうとするためである(藤井専英『新釈漢文大系 第5巻 荀子(上)』明治書院、1966年、21頁)。貝原益軒『和俗童子訓』にも、「古語に曰」としながら「麻の中なるよもぎ」の話が出てくる。
- 27) 肖川、何雪艷『中国秦漢教育史』人民出版社、1994年、134頁。
- 28) 顔之推著、宇都宮清吉訳注『顔氏家訓』1、140-141頁。
- 29) 同上、10頁。貝原益軒『家道訓』では、「顔之推が『婦を初来に教え、子を嬰孩に教う』といったのも……」という一節が見受けられる。
- 30) 顔之推著、宇都宮清吉訳注『顔氏家訓』1、8頁。
- 31) 「卷第三 公孫丑章句上」小林藤人訳注『孟子』上、岩波文庫、123頁。
- 32) 市川安司、遠藤哲夫『新釈漢文大系 第8巻 莊子(下)』明治書院、1967年、498-499頁。
- 33) 藪敏也「王陽明における児童教育の意義と方法」『中村学園研究紀要』第15号、1982年、89頁。
- 34) 近藤康信『新釈漢文大系 第13巻 伝習録』明治書院、1961年、432頁。
- 35) 同上、393-396頁。
- 36) 中国大百科全書出版社編集部編『中国大百科全書 教育』中国大百科全書出版社、1985年、385頁。廖其发主编『中国幼儿教育史』168頁。孙培青主编『中国教育史』(修订版) 242頁。
- 37) 寺崎昌男編『教育名言辞典』東京書籍、1999年、244頁。

- *本稿執筆に当たり、以下の文献も参考にした。
- ・同文館編輯局編『日本教育文庫』同文館、1911年。
 - ・貝原益軒著、石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』岩波書店、1961年。
 - ・浮須婦紗「中江藤樹の育児観」『学苑』383号、昭和女子大学光葉会、1971年、52-59頁。
 - ・加藤常賢編『世界教育寶典 中国教育寶典(下)』玉川大学出版部、1972年。
 - ・宇都宮清吉「顔之推のタクチクス」『中國古代中世史研究』創文社、1977年、505-521頁。
 - ・〔北齊〕顔之推撰、王利器集解『顔氏家訓集解』上海古籍出版社、1980年。
 - ・佐藤明「『賈誼新書』の教育思想(上)」『哲学年報』第49輯、九州大学文学部、1990年、315-332頁。
 - ・佐藤明「『賈誼新書』の教育思想(下)」『哲学年報』第50輯、九州大学文学部、1991年、141-168頁。
 - ・佐藤明「前漢における胎教の思想」『九州中国学会報』第29巻、九州中国学会、1991年、23-39頁。
 - ・吉田公平「東アジアにおける中江藤樹の位置」『東洋古典學研究』第二集、東洋古典學研究会、1996年、137-147頁。
 - ・杜成宪、王伦信『中国幼儿教育史』上海教育出版社、1998年。
 - ・鈴木千春「中国古代・中世における逐月胎児説の変遷」『日本医史学雑誌』第50巻第4号、日本医史学会、2004年、569-589頁。
 - ・唐淑主编『中国学前教育史』人民教育出版社、2007年。
 - ・一見真理子「中華人民共和国における幼児教育史研究の到達点とその課題」『幼児教育史研究』第3号、幼児教育史学会、2008年、59-63頁。
 - ・周玉衡、范喜庆主编『中国学前教育史』复旦大学出版社、2009年。